陸連時報

2013 平成25年 10月号

題字は平沼亮三（初代陸連会長）の書

目　　次

モスクワ世界選手権を終えて（日本選手団団長　尾縣貢）…… 222

世界選手権総評及び反省（日本選手団監督　原田康弘）…… 223

第14回世界陸上競技選手権大会（2013／モスクワ）各ブロック報告（強化委員会）…… 224

インターハイにおける科学委員会バイオメカニクス研究活動報告（科学委員会幹事　柳谷登志雄）…… 230

“日清食品カップ”第29回全国小学生陸上競技交流大会報告（普及育成委員会　熊原誠一）…… 232

アジア陸連（AAA）理事会報告（国際委員長　田中克之）…… 233

国際陸連（IAAF）カウンシル会議報告（国際委員長　田中克之）…… 234

大会観戦ガイド…… 235

陸協NEWS…… 236

事務局からのお知らせ…… 238

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものでありますが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

モスクワ世界選手権を終えて

日本選手団団長　尾縣　貢（専務理事）

幻のオリンピックと言われた1980年のモスクワ大会が開催されたルジニキ・スタジアムが会場となった。約８万人の観客収容数を誇る大型スタジアムであり、観客席全体が屋根に覆われているため風の影響をほとんど受けない造りである。

ロンドンオリンピックの翌年にもかかわらず、世界のトップアスリートがこの伝説のスタジアムにこぞって集まり、９日間にわたるレベルの高い競技を繰り広げた。

新体制の船出

昨年のロンドンオリンピック終了後の髙野進強化委員長の辞任を受けて、11月にリオデジャネイロオリンピックに向けた強化新体制を発足した。新たに強化委員長の任に就いた原田康弘氏を中心に強化方針・戦略を練り直し、約７ヶ月の準備期間を経て、2013年度の最大目標である世界選手権大会に臨んだ。

日本チームは、前回のテグ大会よりも６名少ない44名。ロンドンオリンピックに引き続き、多くの若手を含むチーム構成となった。強化委員会では、世界の情勢、わが国の競技力から数値目標を「メダル１、入賞５」に設定した。

７月には７名の選手がアジア選手権大会（７月３～７日、インド･プネー）、４名の選手がユニバーシアード競技大会（７月７～12日、ロシア・カザン）に出場した。８月の本大会へ向けてのコンディショニングに一抹の不安を感じていたが、強化委員会、医事委員会、専任コーチの三者の連携により一人の辞退者も無く、本大会に臨めたことは評価できる。

日本選手団の戦いを振り返って

詳細な分析、評価・点検に関しては強化委員会に委ね、ここでは全体的な総括を述べたい。チームとしての成績は、「メダル１、入賞７」であり、設定した目標を達成することができた。ただし、期待以上及び期待通りの成績を残した選手がいる一方で、持てる力を発揮することができなかった選手が多数いることに関しては、原因の分析を行う必要がある。

目覚ましい活躍を示したのは、女子長距離･マラソンであった。女子10000mで新谷仁美選手（ユニバーサルエンターテインメント）が見せた、前半からレースをリードし、アフリカのスピードランナーを引き離していく作戦には多くの者が感銘を受けた。新谷選手自身の内に秘めたる勝利に対する執念、自分のレースを展開する意志の強さを感じた。男女長距離陣にとって、新谷選手の走りは尊敬に値するものであり、彼女の頑張りを励みにしてもらいたい。

女子マラソンの福士加代子選手（ワコール）、木﨑良子選手（ダイハツ）の走りは、低迷をしかけていた女子マラソン界に希望をもたらした。気温27度、高い湿度の過酷な条件の中、粘りに粘って３、４位に食い込んだ2名は、夏のマラソンの走り方を示した。特に、これまでの冬のマラソンにおいて、後半に失速を見せた福士選手がフィニッシュラインまで勢い良く駆け抜けたことは、本人とコーチの素晴らしい取り組みの成果である。トラックランナーからマラソンランナーへの転身例として参考にしたい。

同様に男子マラソンの中本健太郎選手（安川電機）の粘り強い走りを高く評価したい。２時間４～６分台の記録を持つケニア選手５名が入賞すら果たせなかったこと、また本大会で２、３、４、８位に入賞を果たし圧倒的な力を示したエチオピア勢が昨年のオリンピックでは出場した３名全員が途中棄権をしたことは、条件の良いマラソンレースでの好記録が、そのまま夏のレースにあてはまらないことを意味する。これらのことは、夏の過酷なマラソンにおいては何が起こるかを予想しがたく、中本選手のように着実な走りで力を出し切ることができれば上位入賞を狙えることを示してくれた。既に強化委員会から提案された「強いランナー」を選考できるシステムの完成を急ぐとともに、夏に戦える能力の育成に力を注ぐ必要がある。

男子ハンマー投の室伏広治選手（ミズノ）、男子４×100mリレーチームの安定したパフォーマンスに安堵（あんど）した一方で、若手の勢いを感じる活躍にリオデジャネイロへの期待を抱いた種目もあった。男子20㎞競歩の西塔拓己選手（東洋大学３年）は、前半から果敢にレースをリードし、６位という素晴らしい成績を残した。弱冠20歳、これからは国際経験を多く積むことが必要となってくるであろう。男子棒高跳で６位に入賞した山本聖途選手（中京大学４年）にも更なる飛躍を感じる。決勝の場を楽しめたという度胸、外国勢にも見劣りしない助走スピードを武器に、国際経験を積むことで、更なる上位を狙えるものと言える。

リオデジャネイロに向けて

日本チームの競技全体を通して、戦える種目と世界との距離がある種目の差が顕著であることを感じた。このことからは、2016年に向けての短期強化策と2020年に向けての中期強化策を２本立てで考える必要があることを再認識した。

今回、入賞を果たした種目あるいは一歩届かなかった種目においては、リオデジャネイロに向けての国際競技力の向上を徹底的に図っていく必要がある。これらの種目に関しては、海外での長期トレーニングを実践したり、海外の転戦などを積極的に行うべきであり、世界で戦うことを日常化する必要がある。

一方で、７年後を目指す種目においては、しっかりとしたタレントの獲得、そして長期にわたる育成・強化プランの実行、アジアで戦える能力の育成を徹底していくべきである。

本大会の選考会となった競技会の開催にご尽力いただきました加盟団体および協賛各社、日本実業団連合、日本学生連合をはじめとする協力団体、活動を支援いただいていますオフィシャルパートナーのアシックス、オフィシャルスポンサーおよびオフィシャルサプライヤーの各社に心から感謝の意を表しますとともに、今後一層のご支援を賜りますようにお願い申し上げます。

世界選手権総評及び反省

日本選手団監督　原田康弘（理事・強化委員長）

はじめに

第14回世界陸上競技選手権大会が、８月10日から18日まで、206カ国1970人の選手が参加してモスクワで開催された。日本選手団も男子32名、女子12名、役員33名の選手団で臨んだ。

大会に向けての取り組み

大会に臨むにあたり、各ブロックでの事前合宿も順調に実施できた。今回から短距離、ハードル、跳躍がナショナル合宿として味の素NTCを活用し、合同で行った。チームとして選手、指導者とのコミュニケーション、大会での情報共有の方法、選手の意識向上などができたことが非常に良かったと考えている。また、大会開催地のモスクワで、チーム全体が最終調整を行い、気候、生活環境、練習環境にも恵まれ、体調を崩す選手もなく順調に最終コンディショニングを整えて大会に臨むことができた。ホテルから会場までのアクセスもバスで10分程度で、時間的なストレスも無く、快適に生活や練習に取り組むことができた。

大会経過

今大会の日本チームとしての目標を「メダル１、入賞５」を掲げて臨んだ大会であったが、結果的には、「メダル１、入賞７」と目標を上回る成績を収めることができた。国別得点でも31点を獲得し、206カ国中15位の成績で、近年のベルリン、テグの世界選手権より上位の成績をあげることができた。大会初日の成績は、チームを勢いに乗せるうえで重要な要因であるが、最初の決勝種目となった女子マラソンで福士加代子選手（ワコール）が積極的に先頭グループに食らいつき、最後までレースをあきらめることなく粘り、３位でゴールインして銅メダルを獲得した。また、木崎良子選手（ダイハツ）もしっかり後半の粘りある走りで4位に入賞した。このことが、日本チームの雰囲気をより明るくさせてくれた。待望の女子マラソンでのメダルに幸先の良いスタートを切ることができた。これでチームが勢いに乗り、２日目には男子20㎞競歩で今大会ランキング1位の鈴木雄介選手（富士通）と若手の西塔拓己選手（東洋大学）が出場し、西塔選手が前半から積極的にトップでレースを引っ張る思い切った展開で、中盤で疲れが見えてきたものの後半良く粘り堂々と６位に入賞した。鈴木選手がランキング１位という意気込みから、逆にレースをうまく作れなかったことが非常に残念であった。

また、女子10000mでは、新谷仁美選手（ユニバーサルエンターテインメント）がケニア、エチオピア勢の強豪選手達を3600mから9500mまでトップを譲らないレース展開で積極的に引っ張っていく姿に観衆からも声援が大きく、見ごたえのあるレースで5位に入賞したことは非常に価値がある。３日目も日本の勢いがフィールド種目に伝わり、男子棒高跳決勝で山本聖途選手（中京大学）が５m75を跳ばないと入賞できないという場面で、最後の３回目で見事クリアし、自己タイ記録で６位入賞した。男子ハンマー投は、世界選手権常連といえるベテランの室伏広治選手（ミズノ）が出場した。室伏選手には、メダル獲得を期待していたが、パネルの位置などが気になり、思うような投げができず、６位入賞で終わってしまった。しかし、オリンピックの翌年という調整が難しい年にも関わらず、入賞できたことは良く頑張ってくれたと感じている。初日から３日目で目標の「メダル１、入賞５」をクリアし、過去の世界選手権では最短となる日数で目標を達成することができた。

しかし、４日目以降においてかなりの苦戦を強いられた。男子50㎞競歩では、谷井孝行選手（SGHグループさがわ）後半追い上げたが今一歩及ばず、２大会連続の悔しい９位に終わってしまった。また、期待の森岡紘一朗選手（富士通）が途中からエネルギー切れし、思うような結果が出せなかった。一方で、荒井広宙選手（自衛隊体育学校）は、入賞には届かなかったものの、自己新記録を出して11位でレースを終えた。男子400mH、男子200mはフルエントリーで臨んだが、準決勝に進出することができたのは400mHでは、岸本鷹幸選手（富士通）、200mでは飯塚翔太選手（中央大学）の２名であった。予選から非常にレベルの高いレースが展開され、高いレベルの実力を安定して発揮できなければ、準決勝および決勝ラウンドを進むことができないことを痛感させられた。岸本選手に関しては、昨年のロンドンオリンピックと同様に１台目での抜き足で失格になり、徹底した修正が必要であると感じた。また、実力がありながら、結果として結びつかなかったのが、男女やり投の村上幸史選手（スズキ浜松AC）と海老原有希選手（スズキ浜松AC）であった。二人にとっては、思いがけない予選敗退で、勝負の厳しさを再認識させられたに違いない。男女のやり投は、期待されていた種目であるだけに、いろいろな経験を積んでいるベテランでも世界選手権の重圧に勝てなかったことが残念であった。

世界選手権も残り２日となったところで、日本チームが期待する男子マラソンと男子４×100mリレーが行われた。男子マラソンは、前半から速いペースではなく非常に落ち着いたレース展開で、日本選手もトップ集団でレースを組み立てていたが、15㎞前で堀端宏行選手（旭化成）が体調不良で途中棄権し、その中で中本健太郎選手（安川電機）が最後まで積極的にトップ集団に食らいついてトップに並び大いに期待したが、残り５㎞からのスパートに対応できず５位入賞となった。しかし、ロンドンオリンピックに続き、粘り強く、暑さに強いという持ち味を存分に発揮したレース内容であった。最終日を飾る男子４×100mリレーは、予選と決勝が同じ日に行われるという、世界選手権では初めてのスケジュールで行われた。日本は２組目の２レーンで、決勝に残る為にはアメリカ、フランスとの勝負であった。桐生―藤光―高瀬―飯塚のオーダーで臨み、アンカーまでアメリカをリードし、２着で決勝進出した。決勝は８レーンで積極的なレース展開であったが、バトンパスで詰まり７着でゴールしたが、イギリスがオーバーゾーン失格になり６位入賞を果たした。レース内容から上位を狙える力があっただけに残念である。

最後に

今回の世界選手権での活躍が、各種目ともバランスよく入賞を果たしてくれた。女子マラソンから始まり、最終日の男子４×100mリレーで締めてくれたことに総合力の向上を感じた。また、今回入賞した選手のほとんどが強化競技者であった。ゴールドおよびシルバーアスリートの基準を相当高いレベルに設定して、他の競技者とは待遇面で大きく差別化した。これにより強化競技者として自覚が生まれ、このような結果を生んだと感じている。一方で、今回出場した種目のなかでも、まだまだ競技力が劣って、世界で戦う準備ができていない種目もあった。しかし、代表選手を派遣すること自体が、世界大会出場を夢見ている若い選手達に希望を与えることにもつながる。今後、若手の躍進でリオデジャネイロに向けて、勝負できる種目を１種目でも増やすこと、そして勝負できる種目が見えてきたことが今回の世界選手権での収穫であった。

第14回世界陸上競技選手権大会（2013／モスクワ）各ブロック報告

強化委員会

男子短距離ブロック　　男子短距離部長：伊東浩司

世界選手権までの経緯

男子短距離ブロックとして、今回の世界選手権を2013年度最重要大会に位置づけ、強化合宿等を実施してきた。また、今年度は、７月にユニバーシアード競技大会・アジア選手権が開催されることと、リレーの世界選手権参加標準記録が高く設定されていないこともあり、バトン練習等を多く実施するのでなく個々の競技力向上に重点をおいた。そこに加えて、織田記念陸上で、桐生祥秀選手（洛南高校）が10秒01という素晴らしい記録を樹立したことによって、４×100mリレーは、全国高校総体も視野を入れながらの大変難しい舵（かじ）取りになった。４×400mリレーに関しては、７月のアジア選手権後に、参加する機会を与えていただけた状況であつた。

レース結果

100m　山縣亮太（予）　４着　10秒21
　　桐生祥秀（予）　４着　10秒31

山縣選手は、ユニバーシアード後の調整が順調に出来、自他共に期待が持てる状態でスタートラインにつくことが出来た。しかし、レース中盤で肉離れを起こしてしまい、準決勝に進むことが出来なかった。桐生選手は、全国高校総体に出場した関係で、モスクワ入りがレース３日前になった。理想の調整が行えなかった中、組で４着、準決勝へ自動的にすすめる３着には、0.01秒差の４位は残念な結果ではあるが立派であった。

200m　飯塚翔太（予）　３着　20秒71
　　（準）　７着　20秒61
　　髙瀬　慧（予）　５着　20秒96
　　小林雄一（予）　４着　20秒97

３選手の専任コーチがともに現地入りをしたこともあり、最終調整まで確認をしていただき、とてもいい状態で当日を迎えた。髙瀬選手（富士通）・小林選手（NTN）は、アジア選手権同様の結果になってしまった。飯塚選手に関しては、予選は余力を残した走りであったが、今後、決勝に進むためには、余力をもった走りの中に、戦術を混ぜていく必要があると感じた。

400m　金丸祐三（予）　６着　46秒18
　　（準）　８着　46秒28

７月22日からの国内最終合宿で、脚を故障した影響があり、彼本来の後半の粘りを発揮するまでに至らなかった。しかし、彼自身の能力の高さを示す準決勝進出であった。過去にも大きな大会前に脚の故障をすることがあり、その教訓を生かして準決勝で勝負出来る状態で大会に臨めるようにしてほしい。

４×100mリレー

桐生－藤光謙司－髙瀬－飯塚（予）　２着　38秒23
　　（決）　６位　38秒39

日本選手権100m優勝者の山縣選手を故障で欠いた状態に加えて、２レーンという悪条件の中での予選は、日本チームの伝統と彼らの集中力からうまれた好走であったと思う。特に、キャプテンとしてチームをけん引してくれた藤光選手（ゼンリン）の存在が大きかった。日本出国時は、レース出場機会の無い可能性がある中、彼の取り組みは、日本スプリント界の中で大きな歴史を作ったと思う。決勝は、８レーンと予選の走りから考えるともう少し攻撃的な戦術でよかったが、その判断が出来なかったことはスタッフの責任であり、選手には申し訳なく思っている。

４×400mリレー

山﨑謙吾－金丸－廣瀬英行－中野弘幸（予）４着
　　３分02秒43

記録・順位とも決勝が見えるところまでの走りをしてくれたが、常に先頭グループでレースを繰り広げるところまでに至らなかった。

最後に

個人種目では、国内で出した記録をいかに本番で出せるかという課題が引き続き残った。４×100mリレーは、シーズンベスト記録の重要性を感じた。４×400mリレーに関しては、400mの走力はもちろんであるが、200・300mのスピードの重要性を再認識させられた。

男女ハードルブロック　　ハードル部長：谷川聡

アジア選手権で男女400mH、女子100mHで金メダルを獲得し、各種目とも日本代表選手はアジア代表として世界選手権に臨んだ。

男子400mHは３名がエントリーして全員の準決勝進出の可能性があったが、そのうち安部孝駿選手（中京大学）、笛木靖宏選手（チームアイマ）は予選落ちになった。安部選手は脚の故障からこの２ヶ月全力では走れない状態、笛木選手は７月のアジア選手権での体調不良および仕事などにより調整不足から、万全な状態で迎えることができなかった。二人とも準決勝に残れるレベルであっただけに、非常に残念な結果になった。岸本鷹幸選手（富士通）は優勝してＡ標準を突破した日本選手権の時より練習が積めた状態で試合に臨み、予選を着順で通過した。翌日も決勝を目指し、前半から攻めるレースをして、ゴール時は組５着で49秒45でもう一歩のところで決勝進出であった。しかし、試合直後に１台目のハードリングでハー

ドル下を抜き脚が通過したという判定で、失格を告げられた。TICでその映像を確認したが、日本の試合であれば、失格にならなかったレベルであったかもしれない。しかし、今後国際レベルで日本国内でもジャッジをしていかないと、国際大会で選手が失格者を出すという事になってしまうとも考えられ、今後対策を練る予定である。

女子400mHは久保倉里美選手（新潟アルビレックスRC）が４度目の出場。前日練習も良い仕上がりで、本人も自信をもって臨んだものの、組で４着、プラス５番目で、着順およびタイムでもあと一人のところで準決勝進出はならなかった。前回は準決勝に進んでおり、経験、実力ともにあることから、決勝を目指しレベルアップをして次回の世界陸上に出場することを期待したい。

女子100mHは初出場となる紫村仁美選手（佐賀陸協）が出場した。試合４日前の練習で転倒し、膝に痛みがあったものの、試合当日には落ち着いた状態で試合に臨んだ。結果的にスタートからの遅れを取り戻すことができず、大きく自己記録を下回ることになった。この種目では、オリンピック出場の木村文子選手（エディオン）もスピードだけでなく筋力の差を感じており、２人で世界に向けて課題を明確にして戦ってもらいたい。

アジア選手権での好成績と世界選手権の成績は異なる様だが、その実力の差が明らかで、他国のアジア選手権出場者の結果をみてみると、日本選手と同じような結果であった。選手一人ひとりの実力の向上だけでなく、ピンポイントで合わせることができるピーキングを日本選手権以降にもう一度作ることができるかが、本番で実力を発揮できる最低条件になる。来年のアジア大会、再来年の北京世界選手権に向けて、計画的に選手それぞれのレベルアップを図り、春から夏にかけてのピーキング方法をヨーロッパ転戦や夏の試合をこなすことで探っていくことが必要かもしれない。

跳躍ブロック　　跳躍部長：吉田孝久

14回目となる世界選手権がモスクワで開かれ、跳躍ブロックからは男子棒高跳で山本聖途選手（中京大学）、荻田大樹選手（ミズノ）、澤野大地選手（富士通）の３名および女子走高跳で福本幸選手（甲南学園AC）が参加した。

今回、初めて３人の代表選手を送ることができた男子棒高跳については、目標を２名以上の決勝進出と入賞に定めた。その対策として、７月中旬に味の素NTCで行った日本チーム全体合宿を活用し、合宿では①ナショナルコーチと選手・専任コーチとの連携、②予選通過と入賞ラインの確認、③本大会の予選と決勝を想定した跳躍練習を目的に実施した。

各選手のコンディションについては、日本選手権以降、学生個人選手権、ユニバーシアードと連戦が続いた山本選手が疲労のために腰に不安を抱えていたが、澤野と荻田の両選手については順調にトレーニングを消化し、万全の態勢で大会に臨むことができた。

予選は大会初日の午前中に行われた。各選手とも５m40から競技を開始したが、５m55にバーが上がったところで風が完全な向かい風となり、難しい条件の中での跳躍となった。山本選手は２回目にこの高さをクリアして決勝進出を決めたが、澤野選手は３回とも惜しい跳躍をしたもののクリアできず２大会連続の決勝進出を果たすことができなかった。荻田選手についても同様で、高さは十分に上がっていたものの、落ち際に胸でバーを引っ掛けてしまい予選で敗退した。

２人以上の日本選手を決勝に進ませることで試合を有利に展開できると考えていたので、澤野選手と荻田選手の予選敗退は我々コーチ陣にとっても痛かった。予選敗退となった２人は風に敏感になりすぎたようでもあったので、条件が悪いときでも跳躍を行うなど対策を行っていく必要があると感じた。

決勝は13日に行われた。山本選手は予選の跳躍で腰に若干の痛みを感じていたが治療と中日の休息のおかげで回復し、大きな不安もなく試合に臨むことができた。５m50から試技を開始したがこれを１回でクリアし、続く５m65では苦労しながら３回目にクリアした。この高さを終えた時点での順位は10位と入賞するには次の５m75が必要であったが、５m75は見事３回目にクリアして男子棒高跳では８年ぶりとなる入賞を決めた。次の５m82は可能性を感じる跳躍をしたもののクリアできず競技を終了した。結局５m75で６位であった。

昨年のオリンピックは記録を残すことができなかったが、その悔しさをバネに今年はしっかりと結果を出すことができた。大舞台で自己記録をマークできたことは、今後大きな自信となるであろう。

福本選手が出場した走高跳の予選は15日に行われた。予選通過ラインは１m95と自己記録が１m92の福本選手にとっては厳しいものであったが、１m92を１回目にクリアできれば決勝進出も可能という予想をたてて大会に臨んだ。最初の高さであった１m78は１回目に越えることができたが、続く１m83は、高さはあったものの３回バーに触れて落としてしまいあっけなく予選敗退となってしまった。今季１m92の自己タイ記録を跳躍し、日本選手権でも１m90で優勝するなど大きな試合で力を発揮してきただけにこの結果は残念であった。この成績では終われないと思うので、秋のシーズンで雪辱を果たしてもらいたい。

投擲ブロック　　投擲部長：栗山佳也

今大会に出場した投擲種目の日本代表選手は、男子ハンマー投の室伏広治選手（ミズノ）、男子やり投の村上幸史選手（スズキ浜松AC）、女子やり投の海老原有希選手

（スズキ浜松AC）の３選手であった。３名共に、それぞれ２大会連続８回目、５大会連続５回目、３大会連続３回目の世界陸上であり、これまでのオリンピック・世界陸上に出場し、好成績を挙げたベテラン選手である。したがって、本大会を迎えるまでのコンディショニングを含め試合当日までの不安材料はほとんど見受けられず順調に仕上がっていたと言える。

８月10日、ハンマー投予選Ａ組の室伏選手はウォーム・アップの練習投擲を見る限り不安を感じるものはなく予選を迎えることができていた。通過ラインは77m、過去の大会では全員がこの記録を通過することはないので決勝進出は76m台と予想した。１投目は74.10m、２投目は角度外のファウル（約77m）、３投目厳しい状況であったが動じることなく76.27mで１組目４位、Ｂ組の結果を待つこととなった。結局12番目は75.18mとなり12日の決勝へ進むこととなった。決勝の第１投目は78.03mと好調な出だしで上位入賞が期待された。しかし、P.Fajdek（ポーランド）が81.97mで今季世界最高をマークし、ほぼ優勝を決定づける投擲を行った。室伏選手はその後77m台は安定して投擲したが、１投目を超えられず６位の結果に終わった。本人のコメントとして、現在の規則では防護ネットの間口が狭く、ハンマー投の特性としてネットに触れない投擲を行うためには左に引っ張らざるを得ないため十分なフィニッシュが取れない。これらの問題点をまとめ国際陸連に規則改正案を提出したいとのことであった。

８月15日、村上選手は体調良好の中、予選を迎えた。通過記録は82.50mであるが、ハンマー投同様12名が超えることはないものと想定されるので80.50mぐらいであれば通過すると思われた。１投目は硬くなって77.75m、２投目では修正して通過できると思われたがファウルで苦戦。３投目も１投目を超えることができず予選順位22位に終わった。結果的には決勝進出ラインは80.18mだったので悔やまれる予選となった。今回の決勝は４位までが85mを越えるハイレベルな試合であったが、村上選手は４月に86mに近い投げをして期待されていただけに惜しいものであった。次大会では雪辱を期待したい。

８月16日、海老原選手は９：30からの予選Ａ組（通過記録61.50m）に出場、１投目58.39mでまずまずのスタート、２投目59.31m、３投目59.80m ７位でＢ組の結果待ちとなった。結局Ｂ組では７人が海老原選手を上回り、60.39mが12番目となった。あと僅（わず）か60㎝ではあるが、アベレージとして３投目までに確実に61m以上を投げることが出来る力が要求される。前回は決勝進出を果たしたが９位に終わっているだけに残念であった。次回の活躍を期待したい。

今後の目標として、より多くの海外試合や合宿を経験し、ライバルとなる外国人選手の実力を観察し、より多くの情報収集を行っていく必要がある。また、若手選手の更なるレベルアップを目指し後に続かなければならない。最後に、今回のモスクワ大会に向けてご尽力頂いたパーソナルコーチの方々やサポートを頂いた方々に感謝申し上げます。

女子短距離ブロック　　女子短距離部長：瀧谷賢司

女子短距離からは福島千里選手（北海道ハイテクAC）が200mに出場した。今シーズンは風等の条件が合わずなかなか参加標準記録を突破出来なかったが、最後のチャンスであった日本選手権でＢ標準記録を突破しての出場となった。

これまでの世界陸上では個人種目とリレー種目に出場していたため、女子短距離ブロック合宿でリレーメンバーとともに本大会に向けた準備をしていたが、今回は個人種目のみのエントリーのため大会前の準備はこれまでと少し違ったパターンとなった。７月22日から行われたナショナルチーム合宿を除き、アジア選手権帰国後からモスクワ出発まで練習拠点である恵庭でじっくり腰を据えてトレーニングを行った。気持ちに余裕を持ちながら自分のことだけに集中し、「質、量ともに高いレベルでトレーニングを消化」（レース後本人コメント）して臨んだ今大会であった。さらに、専任コーチの中村宏之氏（北海道ハイテクAC監督）を選手団スタッフとしてモスクワに派遣し、準備段階から本番のレースまで福島選手が力を出し切れるような環境作りを第一に考え、準備を進めてきた。

残念ながら結果は23秒85の組６着で予選敗退であった。スタートダッシュからの飛び出しでスピードが乗らず、前を走る６レーンのフレイザープライス（ジャマイカ）にコーナーを抜けた時点で大きく離されてしまい、自分の持ち味を出すような想定した展開にならなかった。2008年の北京オリンピック以降、ベルリン世界陸上、広州アジア大会、テグ世界陸上、ロンドンオリンピックと多くの国際大会を経験しているが、今大会は本番で思うように走れないもどかしさ、力を出し切る難しさを改めて痛感するレースとなった。本人も「速かった自分はもういない」とレース後にコメントしているように、今後は新たなアプローチ（例えば、単独で海外を転戦するなど）を取り入れながらレベルアップを図っていくことが必要であろう。

2008年以降、日本女子短距離のエースは福島選手であり、その福島選手の活躍に引っ張られる形で女子短距離、リレーチームは歩を進めてきた。しかし、今大会は1997年アテネ大会から出場し続けてきたリレー種目に参加することが出来ず、先輩方から受け継がれてきたバトンを繋ぐことが出来なかった。昨年のロンドンオリンピックやモスクワ世界陸上におけるリレー種目の結果を見ても、

日本記録よりも高い記録が決勝進出ラインとなっており、今後は意識改革および相当なレベルアップを図っていかなければ世界と戦う場にさえ立てなくなってしまう。女子短距離の明かりを消さないためにも選手達には奮起を期待するとともに、危機感を持って思い切った強化戦略を練っていきたい。

男子中長距離・マラソンブロック

男子中長距離・マラソン部長：宗猛

大会初日に行われた男子10000ｍは、日本選手権の上位３名を代表に選んだ。宇賀地強選手（コニカミノルタ）は集団の中ほどでレースを進め、位置取りで何度も他の選手と接触する等、激しいレースの駆け引きの中で我慢した。8000ｍでペースが上がり遅れたが、シーズンベストの27分50秒79の15位の走りは評価できる。宇賀地選手は、今回の我慢強く、粘り強い走りを自信にして、今後のマラソンに繋げて欲しい。

大迫傑選手（早稲田大学）は出入りの激しいレースに疲れ、7000ｍで離れてしまい、その後は粘れず21位28分19秒50でゴールした。しかし、今後タフなトレーニングを取り入れて、練習の幅を広げれば、ある程度は対応できるのではないかと高い将来性を感じている。

佐藤悠基選手（日清食品グループ）は、モスクワ入りした後に脚の不調を訴えた。痛み止めの薬を服用して出場したが、3000ｍ過ぎに離れ7200ｍで棄権した。３日後の5000ｍの出場については、原田強化委員長、酒井強化副委員長、鳥居ドクターを交えて本人と話し合い、回復状態をチェックして出場を決めた。結果は予選２組で11位13分37秒07に終わり、決勝には進めなかった。正確なメディカルチェック報告を徹底させる重要性を痛感した。

リオデジャネイロに向けては、27分20秒前後の持ちタイムと宇賀地選手のようなどんなレース展開にも対応できるタフな選手の育成が必要だと考える。

８月17日の男子マラソン当日の気温は24℃。日差しが強く選手の体感温度はもっと高く感じるかと思ったが、完走した４選手は『走っていてそんなに暑さは感じなかった』と口を揃えた。だが、その言葉通りに走ったのは中本健太郎選手（安川電機）一人。中本選手は、充実した練習を裏付けに自信に溢れた積極的な走りで、２時間10分50秒でゴール。ロンドンオリンピック６位を上回る５位入賞を果たし、日本男子としては８大会連続入賞を達成した。

他の選手の結果は、藤原正和選手（Honda）14位２時間14分29秒、前田和浩選手（九電工）17位２時間15分25秒、川内優輝選手（埼玉県庁）18位２時間15分35秒。記録的にもパーソナルベストより６分以上悪く、やはりパフォーマンスは落ちているので、やはり暑さ対策の必要性を強く感じた。

マラソン組は全員が問題ない状態に仕上げてモスクワ入りしたが、堀端宏行選手（旭化成）は、スタート直前に体調に異変が出て13㎞で棄権となった。体質的に水分保有率が低く、現地入り後の環境の変化もあり便秘になり、内蔵が動かない状態でスタートしてしまった。

最近のオリンピックや世界選手権の夏型マラソンの結果を見ると、パーソナルベストより２～３分落ちの走りをすると入賞が可能になる。今大会も２時間４分台の記録を持つ２～４位のエチオピア勢は６分以上の落ちだが、優勝したウガンダのキプロティクは２分31秒落ちであった。中本選手が２分15秒の落ち、６・７位のブラジルの選手が８秒～１分17秒の落ちだった。

今後は、科学委員会や医事委員会とタイアップして、科学・医学の両面から暑さ対策を行い、強化としては体質的に暑さに強い選手のパーソナルベストを上げる事が課題だと考えている。

女子中長距離・マラソンブロック

女子中長距離・マラソン部長：武富豊

女子中長距離・マラソンブロックでは、今回のモスクワ世界陸上において、原田強化委員長の「リオデジャネイロオリンピックに向けてマラソン復活が最重要の課題」と言う方針のもと、今後を占う最重要大会と位置づけ、モスクワの世界選手権から戦える代表選手で臨み、リオデジャネイロオリンピックでの結果に繋げて行くスタートの大会として、5000ｍで尾西美咲選手（積水化学）・10000ｍで新谷仁美選手（ユニバーサルエンターテインメント）・マラソンで野口みずき選手（シスメックス）・福士加代子選手（ワコール）・木崎良子選手（ダイハツ）の５名の少数精鋭で臨んだ。

特に女子マラソンでは、野口選手のオリンピック金メダルの練習と経験を体験し、今後の練習への指針にして行こうと、米国・ボルダーにて、野口選手・福士選手がマラソン代表の合同合宿を実施し、同じ練習内容（一部変更もあったが）を行った。後半には木崎選手も合流し、科学的サポートとして杉田正明科学委員長がボルダーやスイス・サンモリッツにも合流し、チームジャパンとして取り組む事が出来た。

大会前の予想では、前回優勝のエドナ･キプラガト（ケニア）、ロンドンオリンピック優勝のティキ・ゲラナ（エチオピア）などの強豪が出場し厳しい戦いになるが、日本選手が粘り強い走りが出来れば入賞は可能だと考えていた。30℃を超す高温となったレースは、暑さを得意とするロンドンオリンピック８位のストラネオ（イタリア）がスタートから積極的にレースを引っ張り、暑さとも戦うサバイバルレースとなった。優勝したキプラガト（ケニア）はスタート直後から第２集団の後方で先頭集団を

観察しながら走り、じっくりと先頭集団に追いつき、残り２㎞まで力の消耗を抑え１度の仕掛けであっさりと勝負を決め、実力の違いを見せつけた。日本選手では、ケニアやエチオピアの有力選手が脱落する中、福士選手が４名になった先頭争いの集団に30㎞過ぎまで残ったが、そこから遅れだしメダル獲得の望みが絶たれたかに思われた。しかし、ここから粘り強い走りを見せ順位を上げ３位に入り、待望のメダルを獲得した。また、10㎞前で遅れた木﨑選手も粘り強く走り、後半失速した選手を拾い４位まで順位を上げ入賞を果たしてくれた。大会前に好調だった野口選手は、脱水症状をおこして途中棄権となったが、福士選手の粘り強い走りを生んだのは、２か月間に及ぶ野口選手との合同合宿の成果だと感謝し、次の大会での走りに期待したい。

10000ｍに出場した新谷選手は、4000ｍ手前で先頭に立ち、残り600ｍまでレースを引っ張り、５位入賞を果たした。今大会では、10000ｍの代表が１人という重責を背負いながら、日本選手が世界大会で入賞するには、この方法しかないという手本になるレース運びをして自己ベストでの入賞はおおいに評価される。

5000ｍ予選１組に出場した尾西選手は、超スローペースのスタートから、急激なペースアップに対応出来ず予選落ちとなった。２組目の結果から考えれば、予選通過の可能性があっただけに、レースに恵まれなかった事が悔やまれる。

今回の女子中長距離･マラソンブロックでは、メダル１･入賞２という結果を出せた。これは、ベルリン世界選手権での成績と同程度である。しかし、ベルリンでの成績を、ロンドンオリンピックに繋げる事が出来なかった。リオデジャネイロオリンピックに向けては、現状で世界において戦える選手層の少なさは非常に厳しく、同じ失敗を繰り返さない為にも、チームジャパンとして、野口選手･福士選手の厳しい合同合宿に倣い、切磋琢磨（せっさたくま）して戦うチーム作りを行う必要性を感じると共に、新谷選手に負けない積極性を持った若手育成が急務と感じる。

競歩ブロック　　競歩部長：今村文男

今大会のブロック目標として、男子競歩にて入賞２を掲げた。ブロックの取り組みとして、ブロック合宿を基本におき、高い個別目標を達成するための一体感のある強化を行い、医事・科学委員会と連携を図り、個々のコンディショニングチェックを行いながら世界選手権へ準備を進めてきた。種目ごとに総括すると、男子20㎞競歩においては、西塔拓己選手（東洋大学）が初出場ながら見事に６位入賞を果たした。レース序盤から積極的に先頭争いに加わり、一時は順位を４位まで上げ、後半も粘ったものの順位を落とし６位でフィニッシュした。昨年のロンドンオリンピックでもレース序盤から飛び出し、レース後半はペースダウンし順位を落とす展開であったが、今大会においては、冷静にレース展開を分析し、安定した歩型でレースを終えたことは、2016年リオデジャネイロオリンピックへ向けて明るい材料をとなった。一方、期待された鈴木雄介選手（富士通）は、レース序盤は後続を大きく引き離し、リードしたものの12㎞以降は精彩を欠き、大きくペースダウンして12位となった。レーススタイルとしては、先行逃げ切りを得意とするが、今後は気象条件やレース展開を読み取り、状況判断と体調に応じたレース対応を検討していかなければならないだろう。

男子50㎞競歩は３名が出場し、谷井孝行選手（SGHグループさがわ）が２大会連続の９位､荒井広宙選手（自衛隊体育学校）が大幅に自己記録を更新し11位、森岡紘一朗選手（富士通）は21位で、この種目において目標としていた入賞を果たすことができなかった。レースを振り返ると昨年のロンドンオリンピックにおいてもそうであったが、近年の50㎞競歩におけるレース展開を分析すると、レース序盤、中盤、後半といった局面で３段階から４段階のペースアップがある傾向と言える。３選手とも今大会においてレース中盤までは、メダリストを含む多くの入賞者を出した第２グループに位置していたが、そこからのペースアップについていけず、レース後半に備え自重したことが結果的に入賞を逃すこととなった。よって、メダリストや入賞者との大きな違いは、レース中盤から後半におけるペースアップにあると言える。今後の課題としては、ペース配分やペースの切り替えのタイミングなど、しっかりとしたレースプランを持って臨むこと、そして、そのための準備として、持続可能な平均ペースの底上げとレース後半におけるスピード持久力を養うために、トラックレースや20㎞競歩の自己記録を伸ばしていくことが必要不可欠と言える。

女子20㎞競歩については、大利久美選手（富士通）が26位、渕瀬真寿美選手（大塚製薬）は29位と順位を上げることができなかった。その背景としては、ロシア、中国の強豪国との力の差が大きく、レース序盤こそ対等に戦えるものの体力面や心理面において､余裕のないレース展開を強いられ、その結果、レース後半に大きくペースダウンし、順位を落とす結果となっている。特に、近年の女子種目は、レース後半のペースアップが男子以上に激しい傾向と言える。よって､今後の課題としては､ペースアップの領域を広げることや体力要因となる筋力や持久力を高めることなどが挙げられる。そのためにも今後、行われるトラックレースにおける自己記録の更新で、きっかけを作って欲しい。

情報部　　情報部長：石塚浩

世界選手権における他国の分析（2009年以降を含む）

大規模な国際競技大会では、選手のユニフォームの胸

には国旗がプリントされ、国の代表選手という扱いとなっている。このため、国ごとの競技力は、メダルテーブルやプレーシングテーブルでもって比較されることが一般的である。本年の開催国ロシアのメディアが大会終盤で米国とのメダル争いを報じていたことからも、メダル数というのは、表彰式での国旗の掲揚と結びつくだけに非常にわかりやすいものである。しかし、各国の競技力といった面では、日本国内の対校戦形式の競技会で多用されている入賞数をもとにした数値（プレーシングテーブル）の方が、より総合的な競技力を表していると考えられる。この数値をもとに、今回のモスクワ世界陸上の上位3ヶ国は、米国の282点を筆頭に、ロシア（183点）、ケニア（138点）の順であった（**表**参照）。特にケニアについては、周知のように中・長距離、マラソンを中心とした種目で集中的に得点をする国である。このケニアの特徴は、世界の陸上界に登場してきて以来、ほぼ変わらない傾向にある。ただし、今回、男子やり投でのジュリアス・イエゴによる4位入賞は、今後の変化を予兆させるものである。

次に**表**をもとに、過去の数大会の世界選手権、オリンピック（以下：五輪）上位25ヶ国のプレーシングテーブルの推移を見ていきたい。2009年ベルリン世界選手権以後の上位7ヶ国は、米国、ロシア、ケニア、ジャマイカ、ドイツ、エチオピア、イギリスであり、順位の変動はあるが、これらの国々によって独占されている。一方で、2000年以降に五輪を開催した国を見ると、オーストラリア（2000年に五輪を開催）は40点台の得点が徐々に下降し、20点台後半まで落ち込み、順位も低下している。ギリシャ（2004年に五輪を開催）はアテネ五輪までは40点前後を獲得し10番台前半を維持していたが、それ以後急速に低迷し、今回のモスクワ世界選手権では、ついに入賞者がゼロとなった。これについては、経済的な問題もあり、スポーツどころではない背景を感じさせるところである。中国（2008年北京五輪）は、順位的には一桁台から10番台前半を維持し、得点も40点台から70点台となっている。一方、本年本連盟が提携を締結したフランスは、安定的に40～50点を獲得し、常に10番前後を推移している。

なお、このような世界レベルの大会で入賞する多くの選手は、世界ジュニア等の競技会で入賞しており、ジュニア段階での強化が非常に重要と考えられる。また、今後のジュニア強化にあたって、欧州を中心とした国々が展開している「システム化された育成組織（エリートアカデミー的なコンセプトで）」を持つことが必須となるであろう。

表　2009～2013年の世界選手権・オリンピックにおけるプレーシングテーブルの変化

09ベルリンWCH			11テグWCH			12ロンドン五輪			13モスクワWCH		
順位	国名	得点	順位	国名	得点	順位	国名	得点	順位	国名	得点
1	米国	231	1	米国	251	1	米国	304	1	米国	282
2	ロシア	154	2	ロシア	202	2	ロシア	179	2	ロシア	183
3	ジャマイカ	136	3	ケニア	174	3	ケニア	112	3	ケニア	139
4	ケニア	120	4	ジャマイカ	101	4	ジャマイカ	107	4	ドイツ	102
5	ドイツ	104	5	ドイツ	83	5	ドイツ	95	5	ジャマイカ	100
6	エチオピア	88	6	イギリス	70	6	エチオピア	90	6	エチオピア	97
7	イギリス	81	7	エチオピア	66	7	イギリス	85	7	イギリス	79
8	ポーランド	73	8	中国	61	8	中国	73	8	ウクライナ	51
9	キューバ	51	9	キューバ	48	9	ウクライナ	47	9	フランス	50
10	中国	50	10	フランス	46	10	フランス	39	10	ポーランド	44
11	オーストラリア	45	11	ポーランド	44	11	トリニ・トバコ	35	11	中国	42
12	フランス	41	12	オーストラリア	34	12	チェコ	30	12	カナダ	41
13	トリニ・トバゴ	32	13	南アフリカ	34	13	オーストラリア	27	13	チェコ	38
14	スペイン	29	14	ウクライナ	29	14	キューバ	25	14	キューバ	32
15	ウクライナ	29	15	ベラルーシ	26	15	カナダ	22	15	日本	31
16	バハマ	27	16	チェコ	25	16	ポーランド	21	16	オーストラリア	27
17	日本	27	17	モロッコ	23	17	トルコ	20	17	スペイン	24
18	南アフリカ	23	18	日本	18	18	ベルギー	19	17	オランダ	24
19	バーレーン	22	19	イタリア	17	18	バハマ	19	19	ナイジェリア	19
20	イタリア	22	20	ノルウェー	15	20	南アフリカ	17	19	イタリア	19
21	ポルトガル	19	21	ブラジル	14	21	イタリア	15	19	ブラジル	19
22	ノルウェー	17	22	ベルギー	14	21	ドミニカ	15	22	南アフリカ	18
23	アイルランド	15	23	ポルトガル	13	23	日本	13	23	コートジボワール	14
24	チェコ	14	24	エストニア	12	23	オランダ	13	24	トリニ・トバゴ	13
25	ルーマニア	14	25	カナダ	12	25	スペイン	12	25	セルビア	12
						25	ボツワナ	12	25	スウェーデン	12
49	ギリシャ	5	36	ギリシャ	8	55	ギリシャ	4	ー	ギリシャ	0

※WCH：世界選手権
※五輪：オリンピック

※トリニ・トバゴ：
トリニダード・トバゴ

インターハイにおける科学委員会バイオメカニクス研究活動報告

科学委員会幹事　柳谷　登志雄

７月30日から８月３日までの５日間にわたり、北部九州インターハイが大分県・大分銀行ドームにて開催され、高校生により熱戦が繰り広げられました。科学委員会では、本大会における高校生アスリートについて、科学的なデータの記録と分析、会場におけるデータのフィードバックなどを行いました。この取り組みは、本委員会により2002年の茨城インターハイから継続されているもので、本年で11年にわたり継続されたものでした。

将来の日本陸上界を担うインターハイ出場者のパフォーマンスを、フォーム分析用のビデオ映像やスピード曲線という形の科学的データとして記録・分析することは、今後のジュニア選手育成および強化のために有用であると考えられます。特に本年のインターハイは、世界選手権モスクワ大会代表にも選出された桐生祥秀選手（洛南高校３年）をはじめ、超高校級で将来有望な競技者が多数出場しており、男女ともに高校日本記録など、様々な記録更新が期待されておりました。これらのデータは、競技力向上のための参考資料として対象である競技者自身やその指導者の先生方に活用して頂くことはもちろんですが、データが公表され、日本全体の競技者や指導者の参考資料となることにより、日本全体の競技力の底上げになる可能性を秘めているため、データを収集することは非常に意義の有ることです。

また、高校生トップアスリートのパフォーマンスと他のアスリートとの差や相違を比べることも重要なのですが、シニア期のトップアスリートが高校生の時期にどのようなフォームあるいはパフォーマンスをしており、シニア期に成長する過程で何が、あるいは何処が変わったかということを語るためには、高校生の時期のデータを取得・分析していなくてはなりません。したがって、たとえ現時点では無名で注目されていない競技者であってもデータを取得しておくことは非常に重要で意義のあることと考えられます。

＜活動概要＞

大会期間中、競技場２階（正面スタンド直送路スタート地点裏手）の会議室を科学委員会の本部として割り当てて頂き、そこを拠点として活動を実施致しました。このため、競技場各所への動線もスムーズであり、さらにカメラ機器の充電やコンピュータによる作業用の電源も提供されておりました。また、競技役員の方々のご理解とご協力により、科学委員会による撮影や測定も円滑に行うことが出来ました。

分析したデータは、各種目の決勝翌日中には掲示板にて公開致しました。データ掲示板はサブトラック入り口に記録計時と並んで設置されておりましたので、選手や関係者の目に触れやすい場所であったと思われます。ただし、炎天下にあったため、ゆっくりと立ち止まって見

表　男子100m決勝の数値データ

風速＋０.１m/s

順位	選手名	記録	最高スピード		スピード逓減率		スタート	10m	20m	30m	40m	50m	60m	70m	80m	90m	100m
			スピード	出現区間													
		s	m/s		%												
1	桐生祥秀 洛南	10.19	11.30	60-70	4.3	通過タイム（秒）	0.00	1.92	2.96	3.91	4.82	5.71	6.59	7.47	8.36	9.27	10.19
						区間タイム（秒）		1.92	1.04	0.95	0.91	0.89	0.88	0.88	0.89	0.91	0.92
						区間スピード（m/s）		5.22	9.55	10.63	10.97	11.27	11.30	11.30	11.25	11.08	10.82
2	小池祐貴 立命館慶祥	10.38	11.09	50-60	4.0	通過タイム（秒）	0.00	1.94	3.01	3.97	4.89	5.79	6.69	7.60	8.51	9.44	10.38
						区間タイム（秒）		1.94	1.07	0.96	0.92	0.90	0.90	0.91	0.91	0.93	0.94
						区間スピード（m/s）		5.15	9.38	10.40	10.88	11.07	11.09	11.05	10.96	10.75	10.64
3	高橋　優 北海道栄	10.55	10.95	50-60	5.0	通過タイム（秒）	0.00	1.98	3.07	4.05	4.99	5.91	6.82	7.74	8.66	9.59	10.55
						区間タイム（秒）		1.98	1.09	0.98	0.94	0.92	0.91	0.92	0.92	0.93	0.96
						区間スピード（m/s）		5.06	9.15	10.16	10.68	10.89	10.95	10.89	10.83	10.82	10.40
6	川上拓也 東海大浦安	10.65	10.82	40-50	7.3	通過タイム（秒）	0.00	1.97	3.05	4.03	4.97	5.90	6.82	7.75	8.70	9.65	10.65
						区間タイム（秒）		1.97	1.08	0.98	0.94	0.93	0.92	0.93	0.95	0.95	1.00
						区間スピード（m/s）		5.08	9.21	10.22	10.65	10.82	10.79	10.74	10.58	10.48	10.03
7	佐々木秀弥 仙台育英	10.65	10.76	50-60	6.0	通過タイム（秒）	0.00	1.93	3.02	4.01	4.96	5.89	6.82	7.76	8.70	9.66	10.65
						区間タイム（秒）		1.93	1.09	0.99	0.95	0.93	0.93	0.94	0.94	0.96	0.99
						区間スピード（m/s）		5.18	9.18	10.15	10.51	10.69	10.76	10.67	10.62	10.43	10.12
8	岡村幸哉 岡豊	10.67	10.79	50-60	4.6	通過タイム（秒）	0.00	2.01	3.09	4.08	5.03	5.96	6.89	7.83	8.76	9.70	10.67
						区間タイム（秒）		2.01	1.08	0.99	0.95	0.93	0.93	0.94	0.93	0.94	0.97
						区間スピード（m/s）		4.98	9.23	10.13	10.52	10.74	10.79	10.65	10.76	10.63	10.29

測定対象：シードレーン（4レーン～7レーン）、3レーンと8レーン
測定機器：レーザー式スピード計測装置（ラベック）
分析項目：10mごとの通過タイム、区間タイムと区間スピード
スピード逓減率：最高スピードから、90mから100m区間のスピードへの低下率

る事が難しく、来年度以降は記録計時も含めて日陰への設置が望ましいと思われます。

例年は競技開始前の慌ただしい中でカメラ映像のキャリブレーション（校正）作業を行う必要がありますが、九州地方の日没が７時過ぎであり、また競技場の施錠が午後９時であったため、今回は競技終了後の時間を活用してキャリブレーション作業が出来ました。

活動班員は以下の科学委員会委員および協力員合計22名でした。

科学委員会委員：柳谷登志雄（幹事・順天堂大学）、松尾彰文（短距離種目責任者・国立スポーツ科学センター）、門野洋介（中・長距離種目責任者・仙台大学）、森丘保典（ハードル種目責任者・日本体育協会）、高松潤二（投擲種目責任者･流通経済大学）、小山宏之（跳躍種目責任者・京都教育大学）

協力班員：小林海（目白大学）、福田厚治（兵庫県立大学）、髙橋恭平（熊本工業高専）、渡辺圭佑（順天堂大学）、山本康平（筑波大学）、木村友哉（順天堂大学）、和田純弥（順天堂大学）、柴山一仁（仙台大学）、松村拓希（筑波大学）、杉本和那美（青山学院大学）、磯崎大二郎（京都教育大学）、大津卓也（筑波大学）、高見裕大（筑波大学）、清水悠（筑波大学）、伊瀬知優翔（流通経済大学）、野中愛里（流通経済大学）

活動は短距離、中・長距離、跳躍、投擲の種目群により４班に別れて実施しましたが、撮影などで人員を多く配置する際やキャリブレーションに際しては種目を跨いで行われました。

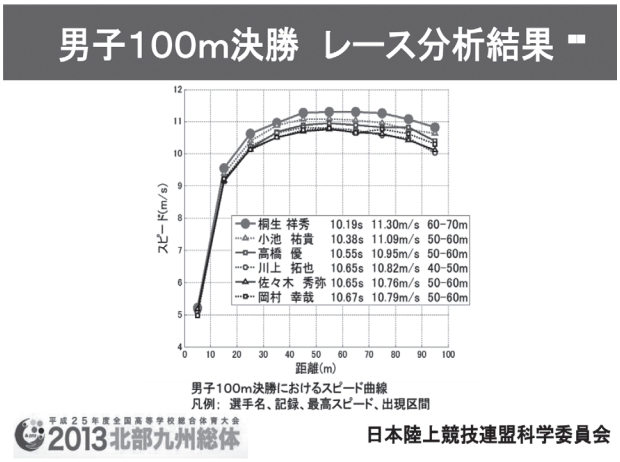
大会事務局より、大会スタッフ用のポロシャツを活動班員一人ずつへ提供して頂きました。従って競技場ではこれを着用して活動致しました。ただし、カメラ機器などで撮影・測定する際には、この上に科学委員会の白いビブスを着用して活動を致しました。

＜分析データ例＞

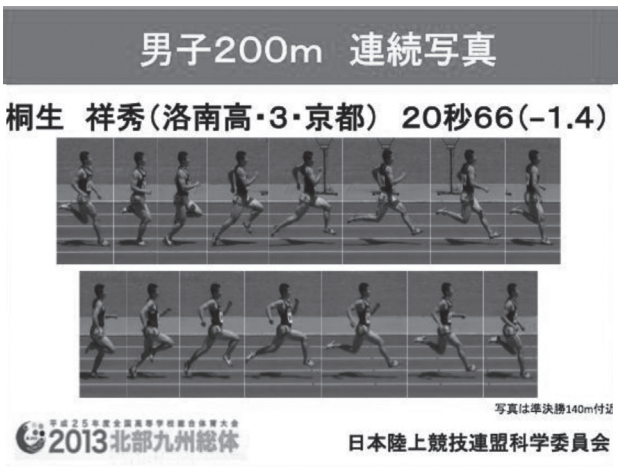
以下に競走種目関して公表した分析データの例を示します。分析データについては、各種目について、表による数値、スピード曲線グラフおよびフォームを示す連続写真で示しました。

なお、100m走に関しては、レーザー式速度測定装置（LAVEG）を用いて、スタート地点の後方から測定を実施しました。また、それ以外の種目については、分析地点毎にハイスピードカメラで撮影した映像から通過タイムを読み取りました。いずれの方法においても、各地点の通過タイム、区間タイム、区間スピードに加え、最大スピードとその出現区間を記載しました。

これらのデータについては、今後、日本陸連ホームページにおいて公表し、ダウンロード可能となる予定です（昨年までのデータは既に公表されております）。また、本年の分析データおよびその解説については、今後発行される陸上競技マガジンにおいて掲載されることになっております。



男子100m決勝のグラフ



男子200m決勝の連続写真

分析データ掲示板

“日清食品カップ”第29回全国小学生陸上競技交流大会報告

普及育成委員会　熊原誠一

“日清食品カップ”第29回全国小学生陸上競技交流大会は、47都道府県代表の小学生競技者1026名および指導者188名を集め、2013年８月23日（金）より８月24日（土）までの２日間の日程で、横浜市・日産スタジアムを主会場とし、新横浜プリンスホテルを選手村として、研修会・競技会を開催することが出来ました。“日清食品カップ”第29回全国小学生陸上競技交流大会の概略を下記の通り報告いたします。

第１日目（８月23日・金曜日）

～前日フリー練習会・指導者研修会・監督会議～

昨年度より47都道府県選手団が研修として安藤百福発明記念館（愛称：カップヌードルミュージアム）の見学を行うことになりました。それにより、競技場到着時間がまちまちとなってしまったため、11時30分から17時30分までの時間帯で、到着選手団から順次前日フリー練習会として主競技場で短距離・跳躍、補助競技場でリレー、投てき練習場でソフトボール投の練習を行うことになりました。

11時30分の練習開始から、14時30分頃までは予定通りに実施することが出来ましたが、14時頃より雷鳴が聞こえ出し、14時30分頃には警報が出される状況となり、屋外での練習は危険と判断して、雨天練習場での練習としました。屋外での練習を止めさせた直後に激しい降雨となりましたが、幸い早めの判断で雨に濡れずに済みました。

雨天練習場は狭いため、ボール投・跳躍・ハードルの練習を行うことができず、後半の練習となった選手団は思うような練習が出来ないような状況でしたが、選手団の皆様方には状況をご理解いただき、ご協力いただけたことに感謝申し上げます。

練習会の一方、15時30分からは各選手団１～２名の指導者に参加していただき、指導者研修会を実施いたしました。今回の研修は、「競技者育成の基礎―タレント発掘の新たな視点―」をテーマに、日本体育協会スポーツ科学研究室・日本陸連普及育成委員会副委員長の伊藤静夫先生による講演を実施いたしました。

45分間と短い研修時間ではありましたが、「10年１万時間の法則（トップアスリート育成時間）から始まり、タレント発掘では、陸上競技は専門化の遅い競技であり、小学生期での将来予測は難しいが、幼少期の陸上競技経験はあらゆるスポーツの基礎となる点ではスポーツ全体の健全な育成には重要であり、指導者も健全育成を念頭に指導することが肝要である。また、多くの種目がある陸上競技ではシニア期の種目間トランスファーにより、競技成績を向上させることもあり、競技者のタレント性や種目適性を的確に見抜く指導者の目が必要である。」といったジュニア育成の方向性やタレントトランスファーといった内容をお話しいただきました。

16時30分より監督会議が行われ、競技運営上の諸注意の他に、今回は天候が不安定なため、雷注意報・警報や大雨警報などの際の対処などが確認されました。大幅に予定時間を過ぎた18時15分に監督会議が終了して、１日目の日程を全て終えることが出来ました。

第２日目（８月24日・土曜日）

～開会式・指導者表彰・競技会・表彰式～

昨日の激しい雨により、芝生が濡れていたため、競技場への入場行進・整列は中止となり、各県ごとに指定されているスタンド席に座っての開会式となりました。

予定通り８時30分の開式通告により開会式は始まりました。主催者を代表して、公益財団法人日本陸上競技連盟　横川浩会長による開会の挨拶の後、後援・協賛者を代表されまして、公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団理事長であり日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO 安藤宏基様、文部科学省大臣官房審議官（スポーツ・青少年局担当）山脇良雄様、横浜市市民局長 西山雄二様よりご挨拶をいただきました。今年度の選手宣誓は、６年生100m長野県代表の小川拓君と田村純菜さんが元気よく行ってくれました。最後に日清食品グループ陸上競技部員の紹介を行い、閉式通告で開会式を終えました。

引き続き、「安藤百福記念章」の授賞式を行い、各都道府県陸上競技協会より推薦された47名の受賞者に対して、日本陸上競技連盟横川浩会長から表彰状、公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団理事長・日清食品ホールディングス株式会社代表取締役社長・CEO安藤宏基様から記念盾が贈呈されました。

表彰終了後の９時30分に友好女子100ｍから競技を開始しました。心配されました天候も、雨がぱらつく程度で何とか持ちこたえ、予定通りに競技は進行出来て、17時30分には男子４×100ｍリレーを行い、全競技を終了することが出来ました。

各種目の表彰式ではプレゼンターとして、日本代表経験のある井村久美子選手（イムラアスリートアカデミー）、髙平慎士選手（富士通）、塚原直貴選手（富士通）、髙瀬慧選手（富士通）、佐藤悠基選手（日清食品グループ）が入賞者にメダル・トロフィーを授与してくれました。

競技結果につきましては、日本陸上競技連盟ホームページをご覧ください。なお、今大会における大会新記録は、女子走高跳埼玉県代表の中澤梨南さんがマークした1.47ｍでした。

また、競技会の模様は、９月１日（日）15時から16時30分にNHK Eテレにて、各種目決勝が録画放映されました（長崎県は９月７日（土）に放送）。

来年度第30回大会以降も、大会開催の基本理念（交流・研修を中心に考える）を踏まえながら、指導者の皆様のご意見等を検討し、改善してまいりたいと考えております。今後とも本大会に対するご理解ならびにご協力をお願い申し上げます。

最後に、ご後援いただきました文部科学省、横浜市、公益財団法人安藤スポーツ・食文化振興財団、公益財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団、読売新聞社、ご協賛いただきました日清食品ホールディングス株式会社、ご協力いただきましたアシックスジャパン株式会社、株式会社ニシ・スポーツ、ミズノ株式会社をはじめ多くの関係各団体・各位に対し、心から感謝申し上げ、“日清食品カップ”第29回全国小学生陸上競技交流大会の報告といたします。

謝辞

“日清食品カップ”第29回全国小学生陸上競技交流大会の開催に当たり、主管いただきました神奈川陸上競技協会役員・競技審判員の皆様、補助員として協力いただきました東京学芸大学・東京女子体育大学・日本女子体育大学陸上競技部員の皆様に対し、心から厚くお礼申し上げます。

アジア陸連（AAA）理事会報告

国際委員長　田中克之（アジア陸連副会長）

アジア陸上競技連盟（AAA）の第20回総会及びアジア陸上競技選手権大会がインドのプネーで開催されたのに併せ、6月30日と7月2日に理事会が同地で開催された。それぞれ理事会概要は次の通りである（自分は都合により後半の理事会には出席できなかったため、AAAより送付された議事概要及びモスクワでの世界選手権の機会に同僚理事から聴取した内容を基に作成した）。

Ⅰ．第75回理事会（6月30日）

1．出席者

（1）ヨルダンとマレーシアを除く全理事出席
（2）国際陸連（IAAF）からディアック会長出席
（3）開会式のみスマリワラ・インド陸連会長出席

2．挨拶

（1）冒頭、インド陸連のスマリワラ会長より「第20回アジア陸上選手権をプネーで開催できることを名誉に思う。開催地が当初予定のチェンナイからプネーに変更になり、大会の準備期間も3週間しかなかったため、至らない点があるかもしれぬが、その場合には寛恕頂きたい。他方、これまでのアジア選手権の中では最大数のエントリーが行われたことを嬉しく思っている」との挨拶。
（2）続いてカルマデイAAA会長より「自分の故郷であるプネーで皆さんを迎えることができ嬉しく思う。プネーはデカン（高原）の女王、東のオクスフォードあるいはマハストラ州の文化・スポーツ都市と呼ばれる。これまでも英連邦ユース競技大会やアジア・グランプリ等の国際大会を開催してきている」「自分は2000年にAAA会長になったがアジアの陸上競技大会カレンダーにアジア・グランプリ、アジア・オールスター、アジア室内等の大会を導入した。ただ、アジア陸連のスポンサーを見つけるという点では上手く行かなかったのが残念だ」「明7月1日の総会では理事選挙が行われるが、これは透明でかつ外部からの介入のない方法で行われなければならない。もし、自分が後2年会長をやらせていただければ、アジアの陸上競技を更なる高みに到達させ、ディアック会長も評価されるような仕事をするつもりである」と述べた。
（3）最後にIAAFのディアック会長から、同会長とIAAFとのこれまでの関わりに触れた後「陸上競技をより世界に普及させることが現在最も重要な点であり、成長著しいアジアがその鍵を握っている。アジアの陸上競技関係者はこの点を心に刻み、更なる努力をしてもらいたい。明日の選挙での幸運を祈る」との話があった。

3．2011年及び2012年の事業報告書と決算書

（1）AAA総会に提出する事務総長（同時に会計）とアジア地域代表の「2011年度及び2012年度の事業（活動）に係る共同報告書」（案）が提示され、特段の議論もなく承認された。
（2）同様に事務総長から「2011年度及び2012年度に係る財務諸表」が提示され、特段の議論なく承認された。

4．AAA 憲章改正

（1）前回の理事会で合意された「次回のAAA理事選挙は2013年の総会で行う。その選挙で選出された理事の任期はIAAFが次回選挙を行う2015年までの2年間とする」「何らかの理由で、IAAFへのアジア地域代表が存在しなくなる場合には、その旨のIAAF事務総長からの通告を受けた後3ヶ月以内に、理事会がアジア地域代表を選出又は指名する」旨の英文改正案が承認された。
（2）シンガポール陸連から提出された「現憲章では、理事会構成員の国籍について、AAAの会長と事務総長のみ同一国籍人がなれるが、その他については同一国から複数の理事を出せない規定になっている。そして現在はこの事務総長にはシンガポール人であるニコラス氏が就いている。この結果シンガポールは他の理事候補を立候補させられない。これを避けるために、事務総長を例外として、他の理事（会長、上席副会長、副会長、女性理事、個人理事）についてのみ複数の同一国籍者を認めないという具合に改正すべきである」とする提案については法律顧問の意見を聞いた上で、これを認めないこととした。理由は「シンガポールが理事候補を立てたいということであれば現憲章の下でも立候補させうる」という見解が示されたため。

5．次期アジア陸上選手権の開催地

2015 年に開催される次回のアジア陸上選手権開催地についてはカタールと中国が立候補しているが、ダハラン上席副会長（カタール）から「中国の理事と協議したが、自分も中国の理事も、開催地の決定は今次理事会ではなく新しい理事で構成される7月2日の次回理事会で審議した方が良いとの見解である」との提案がありこれを承認した。

6．選挙

（1）ニコラス事務総長から「上席副会長に立候補していたインドネシア候補及び副会長に立候補していたバーレーンの候補が夫々立候補を取りやめた」との説明が行われた。
（2）個人理事のカテゴリーで理事選挙に立候補している、ある候補が過去にドーピング違反をしていることから、同人の立候補資格を問題にする意見も出たが、このようなことを事由に立候補を制限する規定が存在しないため、問題視しない事とした。

7．その他

ネパールの理事から「ネパールには二つの陸上競技組織が存在し、これがIAAF等から問題視されてきたが、今般、両者間で共同臨時委員会を立ち上げ、IAAF憲章に基づいた唯一のネパール陸連を設立するための協議に入ることになった」旨の説明があった。

Ⅱ．第76回理事会（7月2日）

1．出席者

ダハラン新会長の下、新しく選出された理事による最初の会議であった（田中及び韓国の理事は都合がつかず欠席）。

2．IAAFに対するアジア地域代表の指名

ダハラン新会長より「IAAF理事会に中国が議席を持っていないことは誰にとっても不幸なことである。中国はこれまで大きな国際陸上競技大会をいくつも開催してきた実績を有する。自分は中国選出の上席副会長をIAAFに対するアジア地域代表に推薦したい」との提案があり異議なく承認された。

3．委員会メンバーの選出

AAAの委員会のメンバー選出を巡り「AAA憲章に従えば、理事会で委員会メンバーを選任するためには、先ず総会が理事会にそのような権限を与える必要があるのではないか」「既に昨日の総会で、ニコラス事務総長から『立候補しているものは全員委員となる』と話したのではないか」という異なった意見が出された。その後、法律顧問から「理事会で各委員会の委員長を選出し、各委員長は地理的に公平な配分をすることを念頭に置きつつ必要とされる数の委員を責任を持って選ぶことにしては如何」との示唆がなされた。理事会はこれを受け入れ各委員会毎に次の通り委員長を指名した。

（1）技術委員会：Surapong Ariyamongkol（タイ）
（2）コーチ委員会：Eidi Alijani（イラン）
（3）医事コミッション：Tigor Tanjung（インドネシア）
（4）クロスカントリー＆道路競走委員会：Rabi Rajkarnikar（ネパール）
（5）競歩委員会：Du Zhaocai（中国）
（6）女性委員会：Mala Sakonhninhom（ラオス）

なお、その後各委員長が人選を行ったが、結果的に立候補者全員が選任されることとなった。

国際陸連（IAAF）カウンシル会議報告

国際委員長　田中克之（国際陸連カウンシル）

ロシアのモスクワで、世界選手権にあわせて、国際陸連（IAAF）総会が８月７日と８日に、カウンシル会議が５日と18日に開催された。IAAF総会報告は、総会陸連代表出席者に譲るとし、カウンシル会議について下記の通り報告する。

なお､最初に「カウンシル会議」のみならず「総会」､「世界選手権」全体に関する気付きの点を挙げると次の通りである。

１．高い評価を受けた大会運営

今回の世界選手権は運営面から見ても技術面から見ても大変成功した大会であったというのが理事会メンバーの共通した印象である。当初空席が目立ったスタジアムも日が経つにつれ観衆が増え、後半には午後の部は連日殆ど満員に近い状況で、またロシア選手の活躍もあり、スタジアム全体に大歓声がこだまする状態であった。観衆の入りは前回のテグ大会より更に良く、午後の部だけで39万人が入ったと言われている。またロシア人審判の質も高く、お陰で抗議・上訴件数が大幅に減ったとの意見も聞かれた。

２．好評を博したIAAFフォーラムの開催

総会を活性化させるため、今回初めての試みとして、総会第１日目に「IAAFワールド・アスレチック・フォーラム」を開催した。フォーラムでは「ガバナンス」「倫理」「陸上競技の普及と育成」という世界の陸上競技界が直面する問題をメインテーマとして活発な討議が展開され、参加者から好評を博した。

３．ドーピング防止の最先端に立つIAAF

今回の総会で「ドーピング初違反での競技出場停止期間を２年から４年に延長することをWADA（世界アンチ・ドーピング機構）に求める」IAAFステートメントを採択した。IAAFは各種スポーツ団体の中でドーピング防止に最も厳しく対処していると自負しているが、現在WADAで検討中の新規定が今年11月に採択され、2015年１月１日に発効する予定になっていることを念頭に置き、WADAに対して最も厳しい制裁規定（４年の出場停止）を採用するよう求めるステートメントを採択することで改めてIAAFのドーピング防止に対する意気込みを示したものである。

４．総会で拒否された憲章改正に関するカウンシル提案

今回の総会にはカウンシルから「IAAFの委員会（committee）を廃止し、コミッション（commission）に統合」との憲章改正提案を行ったが､「この提案は、総会の権限を縮小しようとする非民主的な提案である」との反論が展開され、投票に付されたところ、カウンシル提案は賛成票が採択に必要な３分の２に達せず否決された。

IAAF には理事会を支える機関として委員会（committee）とコミッション（commission）がある。前者は技術、女性、競歩、クロスカントリーであり､メンバーはIAAF総会の選挙で選出される。後者は、競技、医事・ドーピング防止、道路競技等であり、カウンシルが任命する。これまで「両者間、あるいはコミッション間の守備範囲が重複する」「委員会は必ずしも適任者が選ばれるとは限らない」というような批判があり、これを合理化すべきだとする意見を受けて、カウンシルより憲章改正が提案された。

実態をデータ等により、きちんと説明すれば、大方の了解は得られる提案内容と思われたが、IAAF事務局やカウンシル側からきちんとした説明が行われなかったため、思わぬところで足をすくわれたとの感は否めない。

以下、二度開催されたカウンシル会議の報告である。

Ⅰ．カウンシル会議（８月５日）

１．倫理規定関係

事務総長より「前回のカウンシル会議で大筋について合意をみた新しい倫理規定については、その後、微修正を行ったものを各加盟団体に送付済であるが、この新規定の発効日を2014年１月１日としたい」との提案があり、これを承認した。

２．競技関係

（１）競技日程、タイムテーブル

①2014年混成競技チャレンジの日程を承認

②2014年世界室内選手権（ソポット、ポーランド）のメダルデザイン承認

③2014年ワールドカップ競歩(大倉　中国)のタイムテーブル承認

④2014年世界リレー（ナッソー、バハマ）のタイムテーブル原則承認

⑤2014年世界ジュニア（ユージン、米国）の参加標準記録とタイムテーブル承認

⑥2014年コンチネンタル・カップ（マラケシュ、モロッコ）タイムテーブル承認

⑦2015年世界ユース（カリ、コロンビア）の日程を７月15～19日とすることを承認

（２）参加標準記録

世界リレーで、4×100m、4×400mに限り参加標準記録を設けることを承認。なお、参加標準記録設定にあたっては、最大参加数を24チームとし、約16チームは標準記録で参加資格を獲得、残りのチームは世界ランキングによる決定を念頭に置く。

３．ドーピング防止関係

WADAの新規定が本年11月に採択され、2015年１月１日に発効の運びとなることに関連し、①IAAFがスポーツ団体の中でドーピング防止について指導的役割を果たしており、今後もそうあり続けること②WADAが検討中の制裁強化案（冒頭の報告参照）をIAAFが強く支持することを内外に示すため総会に諮るステートメント内容を検討・決定。

４．選手コミッション立候補

事務総長より「モスクワ世界選手権で参加全選手による６名の選手コミッション委員選挙を行うので、各加盟団体から候補者を推薦して欲しい旨要請してきたが、締切日までの立候補は６名のみであった。よって、この６名を2014年１月１日から2017年12月31日までを任期とする委員に任命したい」との説明・提案があり、これを承認。しかし何人かの理事から「６名枠に６名しか立候補がないのは何故か。本来競争があってしかるべきではないか」「IAAF事務局はもう少し積極的に候補者探しの努力をすべきではないか」と言った不満表明と指摘があった。

Ⅱ．カウンシル会議（８月18日）

１．モスクワ世界選手権の評価

（１）多くの理事より､今回の世界選手権は①ロシア側の努力により、最初は空席が目立ったスタジアムも後半には午後の部が連日満員になる等、心配は払しょくされた②審判ら技術部門関係者の質が高かった③ボランティアの活躍も目覚ましかったこと等に言及し大成功とする発言が相次いだ。

（２）事務総長から①17日までの集計では39万人が午後の部に来場した②世界のTV視聴率も最初の３日間を見る限り、前回よりも高い。テグ大会は世界全体で50億人が視聴したが今回はこの数字を上回ることになろう。③最終的には総会には206加盟団体が参加し、競技には203団体が参加した。いずれも新記録である。④ドーピング防止については、今大会での採血数は1900、採尿数は競技会前の時点で100、競技会で500となっているとの説明があった。

２．承認・決定事項

（１）IAAFワールド・チャレンジ

これまで未決定であった同対象競技会の2014年開催日程を次の通り承認した。

①ポンセ（プエルトリコ）５月17日

②マドリード（スペイン）７月19日

③ベレン（ブラジル）８月10日

（２）クロスカントリー・セミナー

ヨーロッパ・クロスカントリー選手権のあと2013年12月９日ベオグラード（セルビア）での開催を承認。

（３）ユース・オリンピック

8×100mリレーのスタートを８：30から16：00に変更することを承認。

大会観戦ガイド

第68回国民体育大会陸上競技会

秋のスポーツの祭典・国体を東京・味の素スタジアムで開催します！　各都道府県を代表する中学生から一般選手までの活躍を応援して下さい！

▼期日：
10月４日（金）～10月８日（火）

▼会場：
味の素スタジアム
東京都調布市西町376-3　TEL：042-440-0555

▼アクセス：
京王線飛田給駅より徒歩５分

▼種目：
【成年男子】100m、400m、800m、110m H、400m H、3000m障害物、10000m競歩、走高跳、走幅跳、ハンマー投、やり投
【少年男子Ａ】100m、400m、5000m、110m H、走幅跳、三段跳、砲丸投、やり投
【少年男子Ｂ】200m、3000m、110m H、走幅跳、砲丸投
【少年男子共通】800m、5000m競歩、走高跳、棒高跳、円盤投
【成年少年男子共通】4×100mリレー
【成年女子】100m、400m、800m、5000m、400m H、10000m競歩、走高跳、棒高跳、三段跳、ハンマー投
【少年女子Ａ】100m、400m、3000m、100m H、走幅跳、ハンマー投
【少年女子Ｂ】200m、1500m、100m H、走幅跳
【少年女子共通】800m、棒高跳、砲丸投、やり投
【成年少年女子共通】4×100mリレー

▼テレビ放映予定：
NHK Eテレ　10月４日（金）15：30～16：30
　　10月５日（土）16：15～17：00

▼問い合せ先：
スポーツ祭東京2013調布市実行委員会事務局
TEL：042-481-7768　FAX：042-485-0741
東京都ホームページ
http://www.sports-sai-tokyo2013.jp/
調布市ホームページ
http://www.chofu-kokutai.jp/

JOCジュニアオリンピックカップ 日本ジュニア・ユース陸上競技選手権大会 第29回日本ジュニア陸上競技選手権大会 第7回日本ユース陸上競技選手権大会

日本ジュニア・ユース選手権を愛知・瑞穂公園陸上競技場で開催します！　若きアスリート達の熱戦を是非、会場で！

▼日時：
10月18日（金）～20日（日）

▼場所：
瑞穂公園陸上競技場
愛知県名古屋市瑞穂区山下通5-1
TEL：052-836-8200

▼アクセス：
地下鉄桜通線「瑞穂運動場西」駅２番出入口より徒歩12分（豊岡通を左へ500m直進）
地下鉄名城線「瑞穂運動場東」駅より徒歩10分

▼種目：
【ジュニアの部】
〈男子　14種目〉
100m、200m、400m、800m、110m H、400m H、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投
〈女子　14種目〉
100m、200m、400m、800m、100m H、400m H、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投
【ユースの部】
〈男子　15種目〉
100m、200m、400m、800m、110m H、400m H、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投、４×100mリレー
〈女子　15種目〉
100m、200m、400m、800m、100m H、400m H、走高跳、棒高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投、円盤投、ハンマー投、やり投、４×100mリレー

▼テレビ放映予定：
東海テレビ放送予定

▼問い合せ先：
一般財団法人愛知陸上競技協会
TEL：052-249-4363　FAX：052-249-4366
http://www.jaaf.or.jp/taikai/1089/

JAAF SHIGA 一般財団法人滋賀陸上競技協会

〒520-3251　湖南市朝国607番地
TEL.0748-72-2056　FAX.0748-72-2056
http://www.biwako.ne.jp/~srkshiga/

滋賀県は、ここ３年、国民体育大会において天皇杯25位以内、皇后杯17位以内をキープしている。今年の東京国体もこの順位以上の結果を出したいと考えている。特に女子棒高跳日本記録保持者の我孫子智美選手、円盤投インターハイ２位の川尻涼介選手には３位以内の入賞を期待している。他にも全国大会入賞経験のある選手が多数出場します。成年少年女子共通リレーも木村茜選手を中心にまとまり、決勝進出を狙っています。皆様の期待に応えるべく頑張りますので、応援よろしくお願いいたします。

（文責：強化委員長　馬場豊）

JAAF OSAKA 一般財団法人大阪陸上競技協会

〒546-0034　大阪市東住吉区長居公園1-1　大阪市長居陸上競技場内
TEL.06-6697-8899　FAX.06-6697-8766
http://www.oaaa.jp/

８月31日、９月１日に第１回全国高等学校陸上競技選抜大会を大阪市長居第２陸上競技場で開催しました。モスクワ世界陸上の女子10000mでは新谷仁美選手が最後の１周までリードする見事なレースでしたが、世界と互角に戦える選手の育成が急務です。最近は、桐生祥秀選手などの若い世代の活躍が期待を高め、モスクワ世界陸上でも海外の若い選手の活躍が注目されました。大阪陸協としても、本大会を通じて日本陸上の次代を担う若き選手の育成に力を注いでいきます。

本誌面を借りて、日本陸連会長に就任された横川当協会名誉会長にお祝いを申し上げます。横川会長は2007世界陸上大阪大会時に当協会の会長に就任され、大阪マラソンの創設や協会法人化など組織改革にも尽力いただき感謝に堪えません。陸連会長として、強い日本陸上づくりにご活躍されるよう大阪を代表してエールを送ります。

（文責：専務理事　竹内 章）

JAAF KYOTO 一般財団法人京都陸上競技協会

〒615-0872　京都市右京区西京極南衣手町57番2
TEL.075-322-5500　FAX.075-322-5501
http://www.krk26.jp/

2013年６月の評議員会で新体制が承認され、川野博康氏の後任として専務理事職に伊東輝雄氏が就任しました。男子駅伝京都府チーム後援会発足と陸協事務局設置を成し遂げた田中セツ子会長も二期目の会長職を務めます。競技会運営と競技力向上の二本柱をより充実させていきたいと、京都陸協に連なる全ての者が気持ちを引き締めているところです。今年は京都陸協創立80周年にも当たっており、記念誌の編纂事業も進めています。過去の諸資料をひもときながら、先輩諸氏のたゆまぬ努力と陸上競技にかける情熱に叱咤激励を受けています。

競技面では洛南高校の桐生祥秀選手を筆頭に、京都の高校生が全国インターハイで大活躍しました。男女合わせて８種目で優勝を成し遂げ、そのうちの４種目は大会新記録という見事な成績を収めました。洛南高校は学校対抗で２年連続の男子優勝を勝ち取りました。これは「チーム京都」として強化を重ねてきた成果であります。秋の国民体育大会においても、京都府選手の活躍を大いに期待したいものです。

国際ゴールドマスターズ大会が10月５日（土）～６日（日）に西京極陸上競技場で開催されます。世界から訪れる選手がよいコンディションで競技できるようにと、準備を進めています。冬の高校駅伝・女子駅伝の準備も始まりました。京都マラソンは２月の開催となり、こちらの準備も本格化してきています。

（文責：広報部長　相模浩史）

JAAF HYOGO 一般財団法人兵庫陸上競技協会

〒655-0076　神戸市中央区吾妻通4丁目1番6号
神戸市生涯学習支援センター内
TEL.078-231-1771　FAX.078-231-1772
http://www.haaa.jp/index2.html

例年にない猛暑の日々が続きますが、皆様方にはますますご清栄のことと存じます。

７月の兵庫選手権・８月の全国総体・全国中学・９月の近畿選手権も終了し、目下選手たちは秋の競技会・駅伝に向けた練習に励んでいることと思います。強化委員会の活動としましては、10月に東京で開催される国民体育大会のための強化合宿を終えたところです。

本県にゆかりのある選手たちが、アジア陸上競技選手権大会、世界陸上競技選手権大会、東アジア競技大会に多く選出されました。一人一人のパフォーマンスが楽しみです。

さて、本協会は昭和８年８月11日に設立され、今年で80周年を迎えました。これまでの諸先輩方の協会運営を受け継ぎ、さらなる協会発展のために益々努力をしていく所存です。

一般財団法人となって２期目、特別委員会を立ち上げ協会運営の不備な点・不都合な点などを整理し、定款及び運営規則の一部見直しを現在行っているところです。

また、第３回神戸マラソンが11月17日（日）に開催されます。約88,000人の申込があり、抽選の結果フルマラソン・クオーターマラソンに合わせて20,000人にさせていただきました。選手の皆様が快適に走ることができるように現在準備しておりますのでよろしくお願いいたします。

陸協NEWS

JAAF NARA 一般財団法人奈良陸上競技協会

〒630-8113　奈良市法蓮町349-1　コーポラス一条415号
TEL.0742-27-2312　FAX.0742-27-2312
http://www.narariku.com/

6月13日(木)～16日(日)にかけて全国高校総体近畿地区予選会を奈良市鴻ノ池陸上競技場で実施いたしました。今大会には日本中の注目を集める桐生祥秀選手（洛南・京都）が出場するとあって、4年前の全国高校総体「奈良大会」に匹敵する観客とマスコミ各社が詰めかけました。

桐生選手は期待通り、100mで10秒17（大会新）、200mでは高橋和裕選手（添上・奈良）が持つ20秒57の日本高校記録を19年ぶりに更新する20秒41(追い風0.5m)の日本高校新記録を樹立してくれました。

また、八種競技では、潮﨑傑選手（滝川第二・兵庫）が2年生ながらも2日間安定した強さを見せ6037点の日本高校新記録を出すなど、日本高校新記録2、大会新記録5のハイレベルな戦いが展開されました。

大会を運営するに当たり、特にマスコミ対応・不正スタート発見装置への理解や全体の流れについて研修をくり返し行う等準備を進めていきました。準備を進める中で洛南高校をはじめ近畿各府県の高体連陸上競技専門部のご助言ご協力がなければ今回のスムーズな運営は実現しなかったと痛感しております。

関係各位には心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

JAAF TOTTORI 一般財団法人鳥取陸上競技協会

〒680-0944　鳥取市布勢146-1
コカ・コーラウエストスポーツパーク陸上競技場（第2研修室）
TEL.0857-28-6540　FAX.0857-28-6540
http://www.hal.ne.jp/trk/

7月より、布勢総合運動公園陸上競技場が部分改修工事に入り、間もなくメーン競技場の改修工事が完了します。本県唯一の一種公認競技場であり、走りやすく、記録が出る競技場としてだけではなく、使いやすい競技場として私たちにとって貴重な施設で、鳥取の陸上競技の普及、強化の聖地となっています。基本的にはメーン、補助競技場ともいつでも使用可能な競技場です。関係機関の絶大な理解と協力で日本一使いやすい競技場と自負しています。全国には立派な競技場がたくさんありますが、誰でもいつでも走ることができ、好記録が出る、そして競技者に優しい競技場は、他にはないのではないかと思います。今回はメーン競技場のフィールド種目の助走路とトラック走路の一部を改修します。その後、補助競技場のトラック走路の一部と走幅跳の助走路を改修する予定です。平素の練習や大会開催に支障がないようにメーン、補助競技場のどちらかが必ず使用できるように工事日程を組んでいただき、多少の不便はあったものの、練習ができ、大会も予定通り開催することができました。9月末には県新人大会と県小学生大会、10月には中四国大学個人選手権大会を開催する予定です。これに間に合わせるために関係機関の方々には本当にお世話になりました。私たちの競技場としてさらに愛着を持って大切に使いたいと思います。鳥取の陸上競技を支えてくれる多くの人たちの存在に感謝し、1つ1つの大会を充実したものにして、競技者や観客に喜んでいただける運営をしていきたいと思います。

（文責：専務理事　新田明彦）

JAAF WAKAYAMA 一般財団法人和歌山陸上競技協会

〒641-0014　和歌山市毛見200　紀三井寺運動公園陸上競技場内
TEL.073-444-3662　FAX.073-444-3662
http://wariku.com/

和歌山陸上競技協会は、2015年に開催される主要3大会（インターハイ・国民体育大会・全国障害者スポーツ大会）の成功に向けて、施設充実・競技運営に取り組んできています。

審判部としては、数年前から新規審判員の養成を定期的に実施して若い人の増加に力を入れています。一般の募集は、ラジオ・インターネット・新聞等を活用して広報しました。また、3月には高校陸上部の顧問の先生にご協力を頂き18歳、高校卒業生を中心に新規審判員の養成も実施し、数十人にB級審判員を取得してもらいました。

各大会に審判員として多数出席してもらえるよう要請しながら競技の運営ならびに審判技術の向上に努めています。

来年度には、国体のリハーサル大会として近畿選手権大会も控えていますので、審判員一同は今まで以上に気を引き締め競技運営に取り組む体制を整えている所です。

競技場周辺スペースが狭いため競技者の皆さん・関係者方々には、ご迷惑をおかけする状況が出てくることも考えられます。万全を尽くして取り組んでまいりますのでご協力よろしくお願いします。

（文責：審判部長　山本宜史）

JAAF SHIMANE 一般財団法人島根陸上競技協会

〒690-0015　松江市上乃木10-4-1　松江市営陸上競技場内
TEL.0852-23-6686　FAX.0852-23-6686
http://www.shimariku.jp/index.html

平成24年3月に一般財団法人島根陸上競技協会としてスタートし、平成25年4月に理事会、評議員会を開催し、役員改選を行い、平成25年、26年度の新役員が決まりました。よろしくお願いいたします。

会　　長：細田重雄
副 会 長：後藤晥一・速水雄一・高瀬正博・山崎晃・大久保稔・斎藤重徳
専務理事：赤名磨差己
常務理事：井上充・持田清道・矢野力・金山滉・清水禎宏・山根耕二・渡部輝美子

第8回世界ユース選手権大会（ウクライナ）に青山聖佳選手（松江商業高校2年）が出場し、女子メドレーリレーで銅メダル獲得に貢献しました。北部九州総体に於いては、青山聖佳選手（松江商業高校2年）が100m5位、200m2位、400m4位入賞し、女子総合6位となり、男子棒高跳では、金山周平選手（大社高校3年）が5m05で2位、澤慎吾選手（大社高校2年）が5m00で4位、来間弘樹選手（大社高校3年）が4m95で7位の同一校によるトリプル入賞を果たし、男子フィールド3位となりました。島根からは棒高跳に5名総体に出場しています。棒高跳のレベルが一層上がることを期待しています。

9月29日(日)第56回松江玉造ハーフマラソン大会を開催します。ハーフマラソンとなって9年目、過去最高の1,409人の参加申込がありました。風光明媚な宍道湖畔で健脚を競って戴きたい。

（文責：総務委員長　矢野 力）

事務局からのお知らせ

◇◆安全対策ガイドブックを作成しました◆◇

日本陸上競技連盟では近年、練習中の痛ましい事故が発生していることから事故を未然に防ぐために、安全対策ガイドブックを作成しました。練習に潜む危険因子、及び事故防止の対策について各種目毎の基本的な注意点、対策が記載されております。

日本陸上競技連盟ホームページにもデータを掲載しておりますので日頃の練習にご活用いただけると幸いです。

尚、本冊子は全国の中学校・高等学校、陸上競技部のある大学、都道府県陸上競技協会等に進呈されています。

URL：http://www.jaaf.or.jp/rikuren/

◇◆ロードレースシーズンが始まります！◆◇

11月から、冬のロードレースシーズンが始まります！

日本陸上競技連盟主催の競技会は、来年の秋の第17回アジア競技大会（2014／仁川）の代表選手選考競技会となっている6競技会。各競技会の詳細な情報は大会ホームページにて。

・第5回横浜国際女子マラソン大会	2013年11月17日（日）開催	http://www.yokohamawomensmarathon.com/
・第67回福岡国際マラソン選手権大会	2013年12月 1日（日）開催	http://www.fukuoka-marathon.com/
・第33回大阪国際女子マラソン大会	2014年 1月26日（日）開催	http://www.osaka-marathon.jp/
・東京マラソン2014	2014年 2月23日（日）開催	http://www.tokyo42195.org/2014/
・第69回びわ湖毎日マラソン大会	2014年 3月 2日（日）開催	http://www.lakebiwa-marathon.com/
・名古屋ウィメンズマラソン2014	2014年 3月 9日（日）開催	http://womens.marathon-festival.com/

陸連時報編集委員

◇編集委員
横川　浩（陸連会長）
三宅　勝次（陸連副会長）
友永　義治（陸連副会長）
尾縣　貢（陸連専務理事）
原田　康弘（陸連強化委員長）
風間　明（陸連事務局長）
高橋　克実（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者
森　泰夫
◇時報編集担当
繁田　進
石塚　浩
木越　清信
宮田　宏
本田香代子
森谷　真咲

陸連時報編集室
〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
ウェブサイト http://www.jaaf.or.jp/
公式動画サイト http://japanathletics.tv/